

紅葉賀

渋谷栄一訳

第一章 藤壺の物語 源氏、藤壺の御前で青海波を舞う

「第一段 御前の試楽」

朱雀院への行幸は、神無月の十日過ぎである。常の行幸とは違って、格別興趣あるはずの催しであったので、御方々、御覧になれないことを残念にお思いになる。主上も、藤壺が御覧になれないのを、もの足りなく思し召されるので、試楽を御前において、お催しあそばす。

源氏中将は、青海波をお舞いになった。一方の舞手には大殿の頭中将。容貌、心づかい、人よりは優れているが、立ち並んでは、やはり花の傍らの深山木である。

入り方の日の光、鮮やかに差し込んでいる時に、楽の聲が高まり、感興もたけなわの時に、同じ舞の足拍子、表情は、世にまたとない様子である。朗唱などをなさっている声は、「これが、仏の御迦陵頻伽のお声だろうか」と聞こえる。美しくしみじみと心打つので、帝は、涙をお拭いになさり、上達部、親王たちも、皆落涙なさった。朗唱が終わって、袖をさっとお直しになると、待ち構えていた楽の音が賑やかに奏され、お顔の色が一段と映えて、常よりも光り輝いてお見えになる。

春宮の女御は、このように立派に見えるのにつけても、おもしるからずお思いになって、神などが、空から魅入りそうな、容貌だこと。嫌な、不吉なこととおっしゃるのを、若い女房などは、厭味など、聞きとがめるのであった。藤壺は、「大それた心のわだかまりがなかったならば、いっそう素晴らしく見えたらうに」とお思いになると、夢のような心地がなさる

のであった。

宮は、そのまま御宿直なのであった。

「今日の試楽は、青海波に万事尽きてしまったな。どう御覧になりましたか」と、お尋ね申し上げあそばすと、心ならずも、お答え申し上げにくくて、格別でございました」とだけお返事申し上げなさる。

「相手役も、悪くはなく見えた。舞の様子、手捌きは、良家の子弟は格別であるな。世間で名声を博している舞の男どもも、確かに大したものであるが、大様で優美な趣きを、表すことができない。試楽の日に、こんなに十分に催してしまったので、紅葉の木陰は、寂しかろうかと思うが、お見せ申したいとの気持ちで、念入りに催させた」などと、お話し申し上げあそばす。

「第二段 試楽の翌日、源氏藤壺と和歌遠贈答」

翌朝、中将の君、

「どのように御覧になりましたでしょうか。何とも言えないくらい気持ちのまま。つらい気持ちのまま立派に舞うことなどはとてもできそうもないわが身が袖を振って舞った気持ちはお分りいただけただけでしょうか。恐れ多いことですが」

とあるお返事、目を奪うほどであったご様子、容貌に、お見過ごしになれなかったのであろうか、

「唐の人が袖振って舞ったことは遠い昔のことですが、その立ち居舞い姿はしみじみと拝見いたしました。並々のことには」

とあるのを、この上なく珍しく、「このようなことにまで、お詳しくいらっしやり、唐国の朝廷まで思いをはせられるお后としてのお和歌を、もう今から」と、自然とほほ笑まれて、持経のように広げてご覧になっていた。

「第三段 十月十余日、朱雀院へ行幸」

行幸には、親王たちなど、宮廷を挙げて一人残らず供奉なさった。春宮もお出ましになる。恒例によって、楽の舟々が漕ぎ廻って、唐楽、高麗楽の

と、数々を尽くした舞は、幾種類も多い。楽の声、鼓の音、四方に響き渡る。先日の源氏の夕映えのお姿、不吉に思し召されて、御誦経などを方々の寺々におさせになるのを、聞く人ももつともであると感じ嘆き申し上げるが、春宮の女御は、大仰であること、ご非難申し上げなさる。

垣代などには、殿上人、地下人でも、優秀だと世間に評判の高い精通した人たちだけをお揃えあそばしていた。宰相二人、左衛門督、右衛門督が、左楽と右楽とを指揮する。舞の師匠たちなど、世間で一流の人たちをそれぞれ招いて、各自家に引き籠もって練習したのであった。

木高い紅葉の下に、四十人の垣代、何とも言い表しようもなく見事に吹き鳴らしている笛の音に響き合っている松風、本当の深山嵐と聞こえて吹き乱れ、色とりどりに散り乱れる木の葉の中から、青海波の光り輝いて舞い出る様子、何とも恐ろしいまでに見える。挿頭の紅葉がたいそう散って薄くなって、顔の照り映える美しさに圧倒された感じがするので、御前に咲いている菊を折って、左大将が差し替えなさる。

日の暮れかかるころに、ほんの少しばかり時雨が降って、空の様子までが感涙を催しているのに、そうした非常に美しい姿で、菊が色とりどりに変色し、その素晴らしいのを冠に挿して、今日は又とない秘術を尽くした入綾の舞の時には、ぞくつと寒気がし、この世の舞とは思われない。何も分るはずのない下人どもで、木の下、岩の陰、築山の木の葉に埋もれている者までが、少し物の情趣を理解できる者は感涙に咽ぶのであった。

承香殿の女御の第四皇子、まだ童姿で、秋風樂をお舞いになったのが、これに次ぐ見物であった。これらに興味も尽きてしまったので、他の事には関心も移らず、かえって興ざましであつたらうか。

その夜、源氏の中將、正三位になられる。頭中將、正四位下に昇進なさる。上達部は、皆しかるべき人々は相應の昇進をなさるのも、この君の昇進につれて恩恵を蒙りなさるので、人の目を驚かし、心をも喜ばせなさる。前世が知りたいほどである。

「第四段 葵の上、源氏の態度を不快に思う」

宮は、そのころご退出なされたので、例によって、お会いできる機会が

ないかと窺い回るのに夢中であつたので、大殿では穏やかではいらつしやれない。その上、あの若草をお迎えになつたのを、二条院では、女の人をお迎えになつたそうだと、誰かが申し上げたので、まことに気に食わないとお思いになつていた。

「内々の様子はご存知なく、そのようにお思いになるのはごもつともであるが、素直で、普通の女性のように恨み言をおっしゃるのなら、自分も腹藏なくお話して、お慰め申し上げようものを、心外なふうにはかりお取りになるのが不愉快なので、起こさなくともよい浮気沙汰まで起こるのだ。相手のご様子は、不十分で、どこが不満だと思われる欠点もない。誰よりも先に結婚した方なので、愛しく大切にお思い申している気持ち、まだご存知ないのであるが、いつかはお思い直されよう」と、安心できる軽率でないご性質だから、いつかは」と、期待できる点では格別なのであった。

第二章 紫の物語 源氏、紫の君に心慰める

「第一段 紫の君、源氏を慕う」

幼い人は馴染まれるにつれて、とてもよい性質、容貌なので、無心に懐いてお側からお放し申されない。暫くの間は、邸内の者にも誰それと知らせまいとお思いになつて、今も離れた対の屋に、お部屋の設備をまたとなく立派にして、ご自分も明け暮れお入りになつて、ありとあらゆるお稽古事をお教え申し上げなさる。お手本を書いてお習字などさせては、まるで他で育つたご自分の娘をお迎えになつたようなお気持ちでいらつしやつた。政所、家司などをはじめとして、別に分けて、心配がないようにお仕えさせなさる。惟光以外の人は、はつきり分からずばかり思い申し上げていた。あの父官も、ご存知ないのであった。

姫君は、やはり時々お思い出しなさる時は、尼君をお慕い申し上げなさる時が多い。君がおいでになる時は、気が紛れていらつしやるが、夜などは、時々はお泊まりになるが、あちらこちらの方々にお忙しくて、暮れとお出かけになるのを、お後を慕いなさる時などがあるのを、とてもか

わいとお思い申し上げていらつしやうた。

二、三日宮中に伺候し、大殿にもいらつしやる時は、とてもひどく塞ぎ込んだりなさるので、気の毒で、母親のいない子を持つたような心地がして、外出も落ち着いてできなくお思いになる。僧都は、これこれと、お聞きになつて、不思議な気がする一方で、嬉しいことだとお思いであつた。あの尼君の法事などをなさる時にも、立派なお供物をお届けなさつた。

「第二段 藤壺の三条宮邸に見舞う」

藤壺が退出していらつしやる三条の宮に、「ご様子も知りたくて、参上なさると、命婦、中納言の君、中務などといった女房たちが応対に出た。」他人行儀なお扱いであるな」とおもしろくなく思うが、落ち着けて、世間一般のお話を申し上げなさつているところに、兵部卿宮が参上なさつた。

この君がいらつしやるとお聞きになつて、お会いなさつた。とても風情あるご様子をして、色つぼくなよなよとしていらつしやるのを、女性として見るにはきつと素晴らしくに違ひなかつた。「と、こつそりと拝見なさるにつけても、あれこれと睦まじくお思いになられて、懇ろにお話など申し上げなさる。宮も、君のご様子がいつもより格別に親しみやすく打ち解けていらつしやるのを、じつに素晴らしく」と拝見なさつて、婿でいらつしやるなどとはお思いよりもならず、女としてお会いしたいものだ」と、色つぼいお気持ちにお考えになる。

日が暮れたので、御簾の内側にお入りになるのを、羨ましく、昔はお上の御待遇で、とても近くで直接にお話申し上げになつたのに、すっかり疎んじていらつしやるのも、辛く思われるとは、理不尽なことであるよ。

「しばしばお伺いすべきですが、特別の事でもない限りは、参上するの自然滞りがちになります。しかるべき御用などは、お申し付けございませう。嬉しく」

などと、堅苦しい挨拶をしてお出になつた。命婦も、手引き申し上げる手段もなく、宮のご様子も以前よりは、いつそう辛いことにお思いになつていて、お打ち解けにならないご様子も、恥ずかしくおいたわしくもあるので、何の効もなく、月日が過ぎて行く。何とはかない御縁か」と、お悩

みになること、お互いに嘆ききれない。

「第三段 故祖母君の服喪明ける」

少納言は、思いがけず嬉しい運が回つて来たこと。これも、故尼上が、姫君様をご心配なさつて、御勤行にもお祈り申し上げなさつた仏の御利益であるうか」と思われる。大殿は、本妻として歴としていらつしやる。あちらこちら大勢お通いになっているのを、本当に成人されてからは、厄介なことも起きようか」と案じられるのだった。しかし、このように特別になつていらつしやるご寵愛のつちは、とても心強い限りである。

ご服喪は、母方の場合は三箇月であると、晦日には忌明け申し上げさせなさるが、他に親もなくご成長なさつたので、派手な色合いではなく、紅、紫、山吹の地だけで織つた御小袷などを召していらつしやる様子、たいそう当世風でかわいらしげである。

「第四段 新年を迎える」

男君は、朝拝に参内なさるうとして、お立ち寄りになつた。

「今日からは大人らしくなれましたか」

と云つて微笑んでいらつしやる、とても素晴らしく魅力的である。早くも、お人形を並べ立てて、忙しくしていらつしやる。三尺の御厨子一具とお道具を色々と並べて、他に小さい御殿をたくさん作つて、差し上げなつていたのを、辺りいっぱい広げて遊んでいらつしやる。

「追儺をやるうと云つて、犬君がこれを壊してしまつたので、直しておりますの」

と云つて、とても大事件だとお思いである。

「なるほど、とてもそつかしい人のやつたことらしいですね。直ぐに直させましよう。今日は涙を慎んで、お泣きななさるな」

と云つて、お出かけになる様子、辺り狭しのご立派さを、女房たちは端に出てお見送り申し上げるので、姫君も立つて行つてお見送り申し上げな

さつて、お人形の中の源氏の君を着飾らせて、内裏に参内させる真似などなさる。

「せめて今年からはもう少し大人らしくなさいませ。十歳を過ぎた人は、お人形遊びはいけないものでございますのに。このようにお婿様をお持ち申されたからには、奥方様らしくおしとやかにお振る舞いになって、お相手申し上げあそばしませ。お髪をお直しする間さえ、お嫌がりあそばして」などと少納言も、お諫め申し上げる。お人形遊びにばかり夢中になっていらつしやるので、これではいけないと思わせ申そうと思つて言つと、心の中で、「わたしは、それでは、夫君を持つたのだわ。この女房たちの夫君というのは、何と醜い人たちなのであろう。わたしは、こんなにも魅力的で若い男性を持つたのだわ」と、今になってお分かりになるのであつた。何と言つても、お年を一つ取つた証拠なのであろう。このように幼稚なご様子が、何かにつけてはつきり分かるので、殿の内の女房たちも変だと思つたが、とてもこのように夫婦らしくないお添い寝相手だろつとは思わなかつたのである。

第三章 藤壺の物語（一） 二月に男皇子を出産

「第一段 左大臣邸に赴く」

宮中から大殿にご退出なさると、いつものように端然と威儀を正した態度で、やさしいそぶりもなく窮屈なので、

「せめて今年からでも、もう少し夫婦らしく態度をお改めになるお気持ちが見えたら、どんなにか嬉しいことでしょう」

などとお申し上げなさるが、わざわざ女の人を置いて、かわいがつていらつしやる「と、お聞きになつてからは、重要な夫人とお考えになつてのことであろう」と、隔て心ばかりが自然と生じて、ますます疎ましく氣づまりにお感じになられるのである。つとめて見知らないように振る舞つて、冗談をおつしやる様子には、強情もを張り通すこともできず、お返事などちよつと申し上げなさるところは、やはり他の女性とはとても違つ

のである。

四歳ほど年上でいらつしやるので、姉様で、氣後れがし、女盛りで非の打ちどころがなくお見えになる。どこにこの人の足りないところがあるか。自分のあまり良くない浮気心からこのようにお恨まれ申すのだ」と、お考えにならずにはいられない。同じ大臣と申し上げる中でも、御信望この上なくいらつしやる方が、宮との間にお一人儲けて大切にお育てなさつた氣位の高さは、とても大変なもので、少しでも疎略にするのは、失敬である」とお思い申し上げていらつしやるのを、男君は、どうしてそんなにまでも」と、お羨なさる、お二人の心の隔てがあるの生じさせたのであろう。

大臣も、このように頼りないお気持ちを、辛いとお思い申し上げになりながらも、お目にかかりなさる時には、恨み事も忘れて、大切にお世話申し上げなさる。翌朝、お帰りになるところにお顔をお見せになつて、お召し替えになる時、高名の御帯、お手ずからお持ちになつてお越しになつてお召物の後ろを引き結び直しなどや、お沓までも手に取りかねないほど世話なさる、大変なお氣の配りようである。

「これは、内宴などということもございませうですから、そのような折にでも」

などとお申し上げなさると、

「その時には、もつと良いものがございませう。これはちよつと目新しい感じのするだけのものですから」

と言つて、無理にお締め申し上げなさる。なるほど、万事にお世話して拝見なさると、生き甲斐が感じられ、たまさかであつても、このような方をお出入りさせてお世話するのに、これ以上の喜びはあるまい」とお見えである。

「第二段 二月十余日、藤壺に皇子誕生」

参賀のご挨拶といつても、多くの所にはお出かけにならず、内裏、春宮、一院だけ、その他では、藤壺の三条の宮にお伺いなさる。

「今日はまた格別にお見えでいらつしやるわ」

「成長されるに従って、恐いまでにお美しくおなりでいらっしやるご様子ですわ」

と、女房たちがお褒め申し上げているのを、宮、几帳の隙間からわずかにお姿を御覧になるにつけても、物思いなさることが多いのであった。

御出産の予定の、十二月も過ぎてしまったのが、気がかりで、今月はいくら何でも、宮家の人々もお待ち申し上げ、主上におかれても、そのお心づもりでいるのに、何事もなく過ぎてしまった。御物の怪のせいであるうか」と、世間の人々もお噂申し上げるのを、宮、とても身にこたえてつらく、「このお産のために、命を落とすことになってしまいそうだ」と、お嘆きになると、「気分もとても苦しくてお悩みになる。

中将の君は、ますます思い当たって、御修法などを、はっきりと事情は知らせずに方々の寺々におさせになる。世の無常につけても、このままはかなく終わってしまうのだろうか」と、あれやこれやお嘆きになっていくと、二月十日過ぎのころに、男御子がお生まれになったので、すっかり心配も消えて、宮中でも宮家の人々もお喜び申し上げなさる。

「長生きを」とお思いなさるのは、つらいことだが、弘徽殿などが、呪わしそうにおっしやっている」と聞いたので、死んだとお聞きになったならば、物笑いの種になるう」と、お気を強くお持ちになって、だんだん少しずつ気分が快方に向かつていかれたのであった。

お上が、早く御子を御覧になりたいとおぼし召されること、この上ないあの、密かなお気持ちとしても、ひどく気がかりで、人のいない時に参上なさって、

「お上が御覧になりたくあそばしていますので、まず拝見して詳しく奏上しましょう」

と申し上げなさるが、

「まだ見苦しい程ですのう」

「と言つて、お見せ申し上げなさらないのも、ごもつともである。実のところ、とても驚くほど珍しいまでに生き写しでいらっしやる顔形、紛うはずもない。宮が、良心の呵責にとても苦しく、女房たちが拝見しても、不審に思われた月勘定の狂いを、どうして変だと思当たらぬだろうか。それほどでないつまらないことでさえも、欠点を探し出そうとする世の中で、

どのような噂がしまいに世に漏れようか」と思い続けなされると、わが身だけがとても情けない。

命婦の君に、まれにお会いになって、切ない言葉を尽くしてお頼みなさるが、何の効果があるはずもない。若宮のお身の上を無性に御覧になりたくお訴え申し上げなさるので、

「どうして、ごうまでもご無理を仰せあそばすのでしょうか。そのうち、自然に御覧あそばされましよう」

と申し上げながら、悩んでいる様子、お互いに一通りでない。気が引ける事柄なので、正面切つておっしやれず、

「いったいいつになったら、直接に、お話し申し上げることができのさう」と言つてお泣きになる姿、お気の毒である。

「どのように前世で約束を交わした縁で、この世にこのような二人の仲に隔てがあるのだろうか、このような隔ては納得がいかない」

とおっしやる。

命婦も、宮のお悩みでいらっしやる様子などを拝見しているので、そつけなく突き放してお扱い申し上げることもできない。

「御覧になっている方も物思をされています。御覧にならないあなたはまたどんなにお嘆きのことでしょう。これが世の人が言う親心の間でしょうかおいたわしい、お心の休まらないお二方ですこと」

と、こつそりとお返事申し上げたのであった。

このように何とも申し上げるすべもなく、お帰りになるものの、世間の人々の噂も煩わしいので、無理無体なことにおっしやりもし、お考えにもなつて、命婦をも、以前信頼していたように気を許してお近づけなさらない。人目に立たないように、穏やかにお接しになる一方で、気に食わないとお思いになる時もあるはずなのを、とても身にこたえて思つてもみながつた心地がするようである。

「第三段 藤壺、皇子を伴つて四月に宮中に戻る」

四月に参内なさる。日数の割には大きく成長なさつていて、だんだん寝返りなどをお打ちになる。驚きあきれぬくらい、間違ひようもないお顔つき

を、「ご存知ないことなので、他に類のない美しい人どうしというのは、なるほど似通つていらつしやるものだ」と、お思いあそばすのであつた。たいそう大切にお慈しみになること、この上もない。源氏の君を、限りなくかわいい人と愛していらつしやりながら、世間の人々のがご賛成申し上げ、そうになつたことによつて、坊にもお据え申し上げられずに終わつたことを、どこまでも残念に、臣下としてもつたいないご様子、容貌で、ご成人していらつしやるのを御覧になるにつけ、おいたわしくおぼし召されるので、「このように高貴な人から、同様に光り輝いてお生まれになつたので、疵のない玉だ」と、お思いあそばして大切になさるので、宮は何につけても、胸の痛みの消える間もなく、不安な思いをしていらつしやる。

いつものように、中將の君が、こちらで管弦のお遊びをなさつていと、お抱き申し上げあそばされて、

「御子たち、大勢いるが、そなただけを、このように小さい時から明け暮れ見てきた。それゆえ、思ひ出されるのだからか。とてもよく似て見える。とても幼いうちは皆このように見えるのであろうか」

と言つて、たいそうかわいらしいとお思い申し上げあそばされている。

中將の君は、顔色が変わつていく心地がして、恐ろしくも、かたじけなくも嬉しくも、哀れにも、あちこちと揺れ動く思いで、涙が落ちてしまひそうである。お声を上げたりして、にこにこしていらつしやる様子が、とても恐いまでにかわいらしいので、自分ながら、この宮に似ているのは大変にもつたいなくお思いになるとは、身臈に過ぎるというものであるよ。宮は、どうにもいたたまれない心地がして、冷汗をお流しになつていたのであつた。中將は、かえつて複雑な思ひが、乱れるようなので、退出なさつた。「自邸でお臥せりになつて、胸のどうにもならない悩みが収まつてから、大殿へ出向こう」とお思いになる。お庭先の前裁が、どことなく青々と見渡される中に、常夏の花がばあつと色美しく咲き出しているのを、折らせなまつて、命婦の君のもとに、お書きになること、多くあるようだ。

「思ひよそえて見ているが、気持ちは慰まず、涙を催させる撫子の花の花であるよ。花と咲いてほしい、と存じておりましたが、効ない二人の仲でしたので」

とある。ちやうど人のいない時であつたのであろうか、御覧に入れて、

「ほんの塵ほどでも、この花びらに」

と申し上げるが、「ご本人にも、もの悲しく思わずにはいらつしやれない時なので、

袖を濡らしている方の縁と思つにつけても、やはり疎ましくなつてしまふ大和撫子です」

とだけ、かすかに中途で書き止めたような歌を、喜びながら差し上げたが、いつものことで、返事はあるまい」と、力なくぼんやりと臥せていらつしやつたところに、胸をときめかして、たいそう嬉しいので、涙がこぼれた。

「第四段 源氏、紫の君に心を慰める」

つくづくと物思いに沈んでいても、晴らしよのない気持ちがあるので、いつものように、気晴らしには西の対にお渡りになる。

取り繕わないで毛羽だつていらつしやる鬢ぐき、うちとけた袿姿で、笛を慕わしく吹き鳴らしながら、お立ち寄りになると、女君、先程の花が露に濡れたような感じで、寄り臥していらつしやる様子、かわいらしく可憐である。愛嬌がこぼれるようで、おいでになりながら早くお渡り下さらないのが、何となく恨めしかったので、いつもと違つて、すねていらつしやるのであろう。端の方に座つて、

「こちらへ」

とおつしやるが、素知らぬ顔で、

「お目にかかることが少なくて」

と口ずさんで、口を覆つていらつしやる様子、たいそう色づぼくてかわいらしい。

「まあ、憎らしい。このようなことをおつしやるようになりましたね。みるめに人を飽きるとは、良くないことですよ」

と言つて、人を召して、お琴取り寄せてお弾かせ申し上げなさる。

「箏の琴は、中の細緒が切れやすいのが厄介だ」

と言つて、平調に下げてお調べになる。調子合わせの小曲だけ弾いて、押しやりなされると、いつまでもすねてもいられず、とてもかわいらしくお弾きになる。

お小さいからだで、左手をさしのべて、弦を揺らしなされる手つき、とてもかわいらしいので、愛しいとお思いになって、笛吹き鳴らしながらお教えになる。とても賢くて難しい調子などを、たった一度で習得なさる。何事につけても才長けたご性格を、期待していた通りである」とお思いになる。保善田具世利」という曲目は、名前は嫌だが、素晴らしくお吹きになると、合奏させて、まだ未熟だが、拍子を間違えず上手のようである。

大殿油を燈して、絵などを御覧になつていると、「お出かけになる予定」とあつたので、供人たちが咳払いし合図申して、

「雨が降つて来そうでございます。」

などと言つので、姫君、いつものように心細くふさいでいらつしやうた。絵を見ることも止めて、うつ伏していらつしやるので、とても可憐で、お髪がとても見事にこぼれかかつているのを、かき撫でて、

「出かけている間は寂しいですか。」

とおつしやると、こっくりなさる。

「わたしも、一日もお目にかからないでいるのは、とてもつらいことですが、お小さくいらつしやるうちは、気安くお思い申すので、まず、ひねくれて嫉妬する人の機嫌を損ねまいと思つて、うつとうしいので、暫く間はこのような出かけるのですよ。大人におなりになつたら、他の所へは決して行きませんよ。人の嫉妬を受けまいなどと思つのも、長生きをして、思いのままに一緒にお暮らし申したいと思つからですよ。」

などと、こまごまとご機嫌をお取り申されると、そうは言つものの恥じらつて、何ともお返事申し上げなされない。そのままお膝に寄りかかつて眠つておしまになつたので、とてもいじらしく思つて、

「今夜は出かけないことになつた。」

とおつしやると、皆立ち上がつて、御膳などをこちらに運ばせた。姫君を起こしてさし上げにさつて、

「出かけないことになつた。」

とお話し申し上げなされると、機嫌を直してお起きになつた。ご一緒にお食事を召し上がる。ほんのちよつとお箸を付けになつて、

「では、お寝みなさい。」

と不安げに思つていらつしやるので、このような人を放つてはどんな道

であつても出かけることはできない、と思われなさる。

このように、引き止められなさる時々も多くあるのを、自然と漏れ聞く人が、大殿にも申し上げたので、

「誰なのでしょう。とても失礼なことではありませんか。」

「今まで誰それとも知れず、そのようにくつついたまま遊んだりするような人は、上品な教養のある人ではありませんまい。」

「宮中辺りで、ちよつと見初めたような女を、ご大層にお扱いになつて、人目に立つかと隠していられるのでしょうか。分別のない幼稚な人だと聞きますから。」

などと、お仕える女房たちも噂し合つていた。

お上におかれても、「このような女の人がある」と、お耳に入れあそばし

て、

「気の毒に、大臣がお嘆きということも、なるほど、まだ幼かつたころを、一生懸命にこんなにお世話してきた気持ち、それくらいのことをご分別できない年頃でもあるまいに。どうして薄情な仕打ちをなさるのだろう。」

と、仰せられるが、恐縮した様子で、お返事も申し上げられないので、お

気に入らないようだ」と、かわいそうにお思いあそばす。

「その一方では、好色がましく振る舞つて、ここに見える女房であれ、またここかしこの女房たちなどと、浅からぬ仲に見えたり噂も聞かないようだが、どのような人目につかない所にあちこち隠れ歩いて、このように人に怨まれることをしているのだろう」と仰せられる。

第四章 源典侍の物語 老女との好色事件

「第一段 源典侍の風評」

帝のお年、かなりお召しあそばされたが、このような方面は、無関心ではいらつしやれず、采女、女蔵人などの容貌や氣立ての良い者を、格別にもてなしお目をかけあそばしていたので、教養のある宮仕え人の多いこの頃である。ちよつとしたことでも、お話しかけになれば、知らない顔をする

者はめつたにいないので、見慣れてしまったのであろうか、なるほど、不思議にも好色な振る舞いのないようだ」と、試しに冗談を申し上げたりなどする折もあるが、恥をかかせない程度に軽くあしらって、本気になつてお取り乱しにならないのを、真面目ぶつてつまらない」と、お思い申し上げる女房もいる。

年をたいそう取っている典侍、人柄も重々しく、才気があり、高貴で、人から尊敬されてはいるものの、たいそう好色な性格で、その方面では腰の軽いのを、こう、年を取つてまで、どうしてそんなにふしだらなのか」と、興味深くお思いになつたので、冗談を言いかけてお試しになると、不釣り合いなとも思わないのであつた。あきれた、とはお思いになりながら、やはりこのような女も興味があるので、お話しかけなどなさつたが、人が漏れ聞いても、年とつた年齢なので、そつけなく振る舞つていらつしやるのを、女は、とてもつらいと思つていた。

「第二段 源氏、源典侍と和歌を詠み交わす」

お上の御髪梳りに伺候したが、終わつたので、お上は御桂係の者をお召しになつてお出になりあそばした後に、他に人もなくて、この典侍がいつもよりこざつぱりとして、姿形、髪具合が艶つぽくて、衣装や、着こなしも、とても派手に洒落て見えるのを、何とも若づくりな」と、苦々しく御覧になる一方で、どんな気であるのか」と、やはり見過ごしがたくて、裳の裾を引つ張つて注意をお引きになると、夏扇に派手な絵の描いてあるのを、顔を隠して振り返つたまなざし、ひどく流し目を使つているが、目の皮がげつそり黒く落ち込んで、肉が削げ落ちてたるんでいる。

「似合わない派手な扇だな」と御覧になつて、ご自分のお持ちのと取り替えて御覧になると、赤い紙で顔に照り返すような色合いで、木高い森の絵を金泥で塗りつぶしてある。その端の方に、筆跡はとても古めかしいが、風情がなくもなく、森の小草が老いてしまつたので、などと書き流してあるのを、他に書くことも他にあるつに、嫌らしい趣向だ」と微笑まれて、

「森こそ夏の、といったようですね」

と言つて、いろいろとおつしやるのも、不釣り合いで、人が見つけるか

と気になるが、女はそうは思つていない。

「あなたがいらしたならば良く馴れた馬に秣を刈つてやりましょう 盛りの過ぎた小草であつても」

と詠み出す様子、この上なく色気たつぷりである。

「笹を分けて入つて行つたら人が注意しましょう いつでも馬を懐けている森の木陰では 厄介なことだからね」

と言つて、お立ちになるのを、袖を取つて、

「まだこんなつらい思いをしたことはございません。今になつて、身の恥に」と言つて泣き出す様子、とても大げさである。

「そのうち、お便りを差し上げましょう。心にかけていますよ」

と言つて、振り切つてお出になるのを、懸命に取りすがつて、橋柱」と恨み言を言うのを、お上はお召し替えが済んで、御障子の隙間から御覧あそばしたのであつた。似つかわしくない仲だな」と、とてもおかしく思召されて、

「好色心がないなどと、いつも困つているようだが、そうは言うものの、見過ごさなかつたのだな」

と言つて、お笑いあそばすので、典侍はばつが悪い気がするが、恋しい人のためなら、濡衣をさえ着たがる類もいるそうだからか、大して弁解も申し上げない。

女房たちも、意外なことだわ」と、取り沙汰するらしいのを、頭中将、聞きつけて、知らないことのないこのわたしが、まだ気がつかかつたことよ」と思つと、いくつになつても止まない好色心を見たく思つて、言い寄つたのであつた。

この君も、人よりは素晴らしいので、あのつれない方の気晴らしに」と思つたが、本当に逢いたい人は、お一人であつたとか。大変な選り好みだことよ。

「第三段 温明殿付近で密会中、頭中将に発見され脅される」

たいそう秘密にしているので、源氏の君はご存知ない。お見かけ申しては、まず恨み言を申すので、お年の程もかわいそうなので、慰めてやろう

とお思いになるが、その気になれない億劫さで、たいそう日数が経つてしまつたが、夕立があつて、その後の涼しい夕闇に紛れて、温明殿の辺りを歩き回つていられると、この典侍、琵琶をとても美しく弾いていた。御前などでも殿方の管弦のお遊びに加わりなどして、殊にこの人に勝る人もない名人なので、恨み言を言いたい気分でしたところから、とてもしみじみと聞こえて来る。

「瓜作りになりやしなまし」

と、声はとても美しく歌うのが、ちよつと気に食わない。鄂州にいたという昔の人も、このように興趣を引かれたのだから」と、耳を止めてお聞きになる。弾き止んで、とても深く思い悩んでいる様子である。君が、東屋を小声で歌つてお近づきになると、

「押し開いていらつしゃいませ」

と、後を続けて歌うのも、普通の女とは違つた気がする。

「誰も訪れて来て濡れる人もいない東屋に、嫌な雨垂れが落ちて来ます」

と嘆くのを、自分一人が怨み言を負う筋ではないが、嫌になるな。何をどうしてこんなに嘆くのだろう」と、思われなさる。

「人妻はもう面倒です、あまり親しくなるまいと思ひます」

と云つて、通り過ぎたいが、あまり無愛想では」と思い直して、相手によるので、少し軽薄な冗談などを言い交わして、これも珍しい経験だとお思ひになる。

頭中將は、この君がたいそう真面目ぶつていて、いつも非難なさるのが癪なので、何食わぬ顔でこつそりお通いの所があちこちに多くあるらしいのを、何とか発見してやろう」とばかり思い続けていたところ、この現場を見つけた気分、まこと嬉しい。このような機会に、少し脅かし申して、お心をびつくりさせて、これに懲りたか、と云つてやろう」と思つて、油断をおさせ申す。

風が冷たく吹いて来て、次第に夜も更けかけてゆくところに、少し寝込んだるつかと思われる様子なので、静かに入つて来ると、君は、安心してお眠りになれない気分なので、ふと聞きつけて、この中將とは思ひも寄らず、「いまだ未練のあるという修理の大夫である」とお思ひになると、年配の人に、このような似つかわしくない振る舞いをして、見つけられるのは何

とも照れくさいので、

「ああ、厄介な。帰りますよ。夫が後から来ることは、分かつていましたから。ひどいな、おだましになるとは」

と云つて、直衣だけを取つて、屏風の後ろにお入りになった。中將、おかしさを堪えて、お引き廻らしになつてある屏風のもとに近寄つて、ばたばたと畳み寄せて、大げさに振る舞つてあわてさせると、典侍は、年取つてゐるが、ひどく上品ぶつた艶っぽい女で、以前にもこのようなことがあつて、肝を冷やしたことが度々あつたので、馴れていて、ひどく気は動転してゐながらも、この君をどうなされてしまうのか」と心配で、震えながらしつかりと取りすがつてゐる。誰とも分からないように逃げ出そう」とお思ひになるが、だらしのない恰好で、冠などをひん曲げて逃げて行くような後ろ姿を思つと、まことに醜態である」と、おためらいなさる。

中將、何とかして自分だとは知られ申すまい」と思つて、何とも言わぬ。ただひどく怒つた形相を作つて、太刀を引き抜くと、女は、

「あなた様、あなた様」

と、向かつて手を擦り合わせて拜むので、あやうく笑い出してしまひそうになる。好ましく若づくりして振る舞つてゐる表面だけは、まあ見られたものであるが、五十七、八歳の女が、着物をきちんと付けず慌てふためいてゐる様子、実に素晴らしい二十代の若者たちの間にはさまれて怖がっているのは、何ともみつともない。このように別人のように装つて、恐ろしい様子を見せるが、かえつてはつきりとお見破りになつて、わたしだと知つてわざとやつてゐるのだな」と、馬鹿らしくなつた。あの男のようだ」とお分かりになると、とてもおかしかつたので、太刀を抜いて腕をつかまえて、とてもきつくおつねりになつたので、悔しいと思ひながらも、堪え切れずに笑つてしまつた。

「ほんと、正気の沙汰かね。冗談も出来ないね。さあ、この直衣を着よう」

とおっしゃるが、しつかりとつかんで、全然お放し申さない。

「それでは、一緒に」

と云つて、中將の帯を解いてお脱がせになると、脱ぐまいと抵抗するのを、何かと引つ張り合つうちに、開いている所からびりびりと破れてしまつた。中將は、

「隠している浮名も洩れ出てしまいましょ、引つ張り合つて破れてしまつた二人の仲の衣から、上に着たら、明白でましょ、」

と言つ。君は、

「この女との仲まで知られてしまつのを承知の上でやつて来て、夏衣を着るとは、何と薄情で浅薄なお気持ちかと思ひますよ、」

と詠み返して、恨みつこなしのだからしない恰好に引き破られて、揃つてお出になつた。

「第四段 翌日、源氏と頭中将と宮中で応酬しあつ」

君は、実に残念にも見つけられてしまつたことよ、と思つて、臥せつていらつしやつた。典侍は、情けないことと思つたが、落としていつた御指貫や、帯などを、翌朝お届け申した。

「恨んでも何の甲斐もありません、次々とやつて来ては帰つていつたお二人の波の後では、底もあらわになつて、」

とある。臆面もないありさまだ、と御覧になるのも憎らしいが、困りきつているのもやはりかわいそうなので、

「荒々しく暴れた頭中将には驚かないが、その彼を寄せつけたあなたをどうして恨まずにはいらねましょか、」

とだけあつた。帯は、中将のであつた。「自分の直衣よりは色が濃い、と御覧になると、端袖もないのであつた。

「見苦しいことだ。夢中になつて浮気に耽る人は、このとおり馬鹿馬鹿しい目を見ることも多いのだろ、」と、ますます自重せずにはいらつしやれない。

中将が、宿直所から、これを、まずはお付けあそばせ、と、包んで寄こしたのを、どうやつて、持つて行つたのか、と憎らしく思つた。この帯を獲らなかつたら、大変だつた、とお思ひになる。同じ色の紙に包んで、仲が切れたらわたしのせいだと非難されよつかと思つたが、縹の帯などわたしには関係ありません、

と、お遣りになる。折り返し、

「あなたにこのように取られてしまつた帯ですから、こんな具合に仲も切れてしまつたものとしましょ、逃れることはできませんよ、」

とある。

日が高くなつてから、それぞれ殿上に参内なさつた。とても落ち着いて知らぬ顔をしていらつしやると、頭の君もとてもおかしかつたが、公事を多く奏上し宣下する日なので、実に端麗に真面目くさつて見えるのを見るのも、お互いについほほ笑んでしまふ。人のいない隙に近寄つて、

「秘密事は懲りたでましょ、」

と言つて、とても憎らしそうな流し目である。

「どうして、そんなことがありましょ。そのまま帰つてしまつたあなたこそ、お気の毒だ。本当の話、嫌なものだよ、男女の仲とは、」

と言ひ交わして、鳥籠の山にある川の名、と、互いに口固めしあつた。

さて、それから後、ともすれば何かの折毎に、話を持ち出す種とするので、ますますあの厄介な女のためにと、お思ひ知りになつたであろう。女は、相変わらずまこと色気たつぷりに恨み言をいつて寄こすが、興醒めだと逃げ回りなざる。

中将は、妹の君にも申し上げず、ただ、何かの時の脅迫の材料にしようと思つていた。高貴な身分の妃からお生まれになつた親王たちでさえ、お上の御待遇がこの上ないのを憚つて、とても御遠慮申し上げていらつしやるのに、この中将は、絶対に庄倒され申すまい、と、ちよつとした事柄につけても対抗申し上げなざる。

この君一人が、姫君と同腹なのであつた。帝のお子というだけだ、自分だつて、同じ大臣と申すが、ご信望の格別な方が、内親王腹にもうけた子息として大事に育てられているのは、どれほど劣る身分とは、お思ひにならないのであろう。人となりも、すべて整つており、どの面でも理想的で、満ち足りていらつしやるのであつた。このお二方の競争は、変わつていくところがあつた。けれども、煩わしいので省略する。

第五章 藤壺の物語（三） 秋、藤壺は中宮、源氏は宰相となる

「第一段 七月に藤壺女御、中宮に立つ」

七月に、后がお立ちになるようであった。源氏の君、宰相におなりになった。帝、御讓位あそばすお心づもりが近くなつて、この若君を春宮に、とお考えあそばされるが、御後見なさるべき方がいらつしやらない。御母方が、みな親王方で、皇族が政治を執るべき筋合ではないので、せめて母宮だけでも不動の地位におつけ申して、お力にとお考えあそばすのであった。弘徽殿、ますますお心穏やかでない、道理である。けれども、

「春宮の御世が、もう直ぐになつたのだから、疑いない御地位である。ご安心されよ」

とお慰め申し上げあそばすのであった。なるほど、春宮の御母堂として二十余年におなりの女御を差し置き申して、先にお越し申されることは難しいことだ」と、例によつて、穏やかならず世間の人も噂するのであった。参内なさる夜のお供に、宰相君もお仕え申し上げなさる。同じ宮と申し上げる中でも、后腹の内親王で、玉のように美しく光り輝いて、類ない御寵愛をさえ蒙つていらつしやるので、世間の人々もとても特別に御奉仕申し上げた。言うまでもなく、切ないお心の中では、御輿の中も思いやられて、ますます手も届かない気持ちとなさると、じつとしてはいられないまでに思われた。

「尽きない恋の思いに何も見えない　はるか高い地位につかれる方を仰ぎ見るにつけても」

とだけ、独言が口をついて出て、何につけ切なく思われる。

皇子は、ご成長なさつていく月日につれて、とてもお見分け申しがたいほどでいらつしやるのを、宮は、まこと辛い、とお思いになるが、気付く人はいないらしい。なるほど、どのように作り変えたならば、負けなくらいの方がこの世にお生まれになるうか。月と日が似通つて光り輝いていくように、世人も思つていた。